

2007. 12. 19

北海道開発局長殿

平取ダム建設に対する反対決議書

我々は11月18日に沙流川水系のダム問題に関する現地集会を行い、稼動開始後10年になる二風谷ダムの現状と、さらに建設が計画されている平取ダムの建設予定地を視察し、それをふまえて論議した。その結果、以下の結論に達した。

二風谷ダムには、稼動開始後10年ですでに当初計画の堆砂容量550万立米の2倍を超える1,189万立米の土砂が堆積している。ダムの堆砂容量とは、ダム建設後100年間の堆積土砂量の想定値のほずである。稼動開始後の10年間で堆積土砂量はその2倍を超えている事態は、このダム計画がいかにかに沙流川の特性を無視した無謀なものだったかを示している。

それにもかかわらず、開発局は今年7月に二風谷、平取両ダムの計画変更を行い、二風谷ダムの堆砂容量を当初計画の3倍に近い1,430万立米に変更し、このダムの堆砂容量にあたかもまだ余裕がある体裁にした。しかし土砂堆積のスピードが今後も変わらない以上、ダム内の堆積土砂量は2年もすれば変更した堆砂容量をまた超えるはずである。その時はどうするのか。そもそも堆砂容量は、土砂の堆積量に合わせて変える筋合いのものではない。

たった10年間の土砂堆積によって、二風谷ダムの有効貯水容量はずでに当初計画の2,600万立米から34%減の1,720万立米にまで落ちている。このダムは早晚治水ダムとしての機能を失うとみてよい。開発局は、工業用水の需要消失後も治水用と称して二風谷にダムを作ったことを失敗として認め、その破綻を形式的に繕う計画変更などを止めるべきである。

さらに、二風谷ダムのこの事態を無視して、開発局は支流の額平川に新たに平取ダムを建設しようとしているが、今年の計画変更によってその堆砂容量を当初計画の1,190万立米から九分の一以下の130万立米に縮小した。地形と地質上の特色から、沙流川水系で最も土砂と流木の流出量が多い額平川に計画するダムの堆砂容量をこれほど減らした理由を、開発局は“融雪期(4-5月下旬)には貯水を行わず、ダム最下部に設ける放流設備を利用して排砂を行う”からとしている。つまり「排砂ゲート」を設置し、常時はこれを閉めて貯水し、増

水時に開いて増水の掃流力でダム内の土砂を放出する方式と見て間違いない。

しかし、この排砂ゲート方式は、昭和 60 年に富山県黒部川の出し平ダム、さらにその後下流の宇奈月ダムでも採用されて以来、富山湾の漁業に大被害を与えて今に至っている。これはダム湖に流入する流木、落葉等の有機物が湖底の無気環境の中で腐敗して生ずる、ダム特有の大量のヘドロが土砂とともに放出されることによる。平取ダムが作られた場合には、流域の汚染はもとより、門別一帯の漁業に大きな被害をもたらすのは火を見るより明らかである。

また、平取ダムの建設予定地は脆弱な地質の断崖が連なる地域である。ダムによる湛水が崩落、地すべりを引き起こしてダム津波等による災害を引き起こす可能性が極めて高い。

さらに重要なことは、ここにはアイヌ民族の神聖な祈りの場、チノミシリが存在することである。二風谷裁判の判決は、アイヌ民族が固有の文化を享有する権利を明記している。

上記の諸理由から、我々は平取ダムの建設に断固反対し、計画の撤回を強く求める。

平成 19 年 11 月

北海道自然保護協会 会長 佐藤謙

北海道自然保護連合 代表 寺島一男

富川北一条被害者の会

十勝自然保護協会 会長 安藤御史

ザ・フォレスト・レンジャーズ 代表 市川守弘

自然林再生ネットワーク 代表 前田菜穂子

石城塾 代表 石城謙吉

事務局 二井田高敏

千室蘭市輪西町 2 丁目 7-9

☎0143-44-4823

口が海に流された事について、どのように認識しているか。

II 平取ダム of 建設計画に関して

1. 平成 19 年の計画変更によって、堆砂容量が 1190 万立米から 130 万立米へと一気に九分の一に減らされたが、これは排砂ゲートを設置することにしたためと考えられる。しかし、黒部川の出し平ダムや宇奈月ダムからの排砂ゲートによる土砂の放流が、同時にダム内に貯留された多量のヘドロを放出して富山湾の漁業に大きな災害をもたらしていることについて、どのように認識しているか。
2. 平取ダムは総貯水量が 4580 万立米と二風谷ダムより大きい反面、淡水面積は二風谷ダムの 4.3 平方キロに比べて 3.1 平方キロと小さく、常時満水位の水深が 22m を越える、二風谷ダムより 4 倍以上深いダムである。またこのダムが作られる額平川は流木が多いことで知られている。このようなダムは、湖底に堆積する大量の有機物が無気的環境下で分解することによるダム特有のヘドロがもっとも大量に生成されるダムと見てよい。

このダムの融雪時のゲート解放によって、堤体の底部から大量のヘドロが放出され、それが河口に達して富川一帯の海域の漁業に富山湾同様の多きな被害もたらすことが予想されるが、このことについてどう考えるか。
3. 平取ダム予定地の右岸はニセウ層頁岩からなる急斜面である。平成 15 年の台風 10 号の際に崩壊密度が極めて高かったのは、まさにこのニセウ層頁岩の急斜面だった。現に、予定地の右岸には新旧無数の崩落跡が認められる。したがってダムが作られた場合にはダム湖斜面の崩壊による大量の土砂の崩落が繰り返し起こると予想される。このことから見ても、平取ダム予定地はダム建設の不適地と思われるが、見解をお聞きしたい。
4. さらに、このダムが計画している融雪期の放水は、常時満水位の標高 167.4m から最低水位の標高 145.0m まで、水位を 22m 以上急激に下げる事になる。このような場合には満水時の水圧で土中間隙水が増大することによって弱体化した斜面に、崩落がより起こりやすくなることが知られている。上記 3 で指摘したように、もともと崩落の起こりやすい予定地の斜面が、この排砂ゲートの開放によってさらに激しい崩落を引き起こす可能性がきわめて高いと考えられる。これについてどう思うか。
5. また額平川のダム建設予定地の上流の右岸斜面に分布する白亜系中部蝦夷層群の泥岩は地滑りを起こしやすい性質を持つことで知られ、平成 15 年の台風 10 号による洪水時にも日高地方で最大規模の斜面崩壊を引き起こし、膨大な土砂と流木を本流に流出させた。この流域特有の、このような現象に、黒部川と同じ方式の排砂ゲートでは対応できないはずだとの見方が専門家の間に多い。平取ダムで予想される膨大な土砂と流木の流入に対応する新機軸があるのか否か。

公開質問状

沙流川水系で現在稼働中の二風谷ダムと、建設計画中の平取ダムとに関して、下記の質問を致します。平成20年1月15日までに文書で回答を下さるよう、要望します。

I 二風谷ダムの現状に関して

1. 二風谷ダムには、平成18年10月の段階で、当初計画の堆砂容量550万立米の2倍を超える1189万立米の土砂が堆積している。ダムの堆砂容量は、稼働100年後を目途とする堆砂総量として設定するものである。このことからすると、二風谷ダムの堆砂容量の設定はこのダムの現実の土砂堆積速度の二十分の一以下の見積もりだった事になり、ダムの設計が基本的に誤っていた事になる。開発局はこのことを認めるのか、否か。
2. 二風谷ダムの当初計画における堆砂容量の数値550万立米は、どのような調査、どのような計算によって得られたものか、算定の根拠をお聞きかせ願いたい。
3. 平成19年の計画変更によって、このダムは洪水期(7-9月)の間水位を0(標高40m)に落とし、洪水発生時にのみ満水状態にすることになった。この、洪水時の貯水後の放水は、どのようなゲート操作によって行うのか。
4. 現在このダムに貯留している1200万立米の土砂は、上流から堤体近くにかけて砂礫、砂、粘土、ヘドロ等の順で分離して堆積しているはずである。それらはどのような形態で、また量的にはどのような配分で堆積しているか。
5. ダムは、川を流れる土砂の量と質(大小の粒径構成)とを変えてしまうことが全国の河川で明らかになっている。上流から二風谷ダムに流入する土砂の粒径構成とダムから流出する土砂の粒径の変化は現在どのようなになっているか。具体的数値と調査方法を教えて欲しい。
6. 現在、二風谷ダムに流入する土砂量とダムから排出される土砂量の比率はどれくらいか。これも、具体的数値と調査方法を教えてほしい。
7. 二風谷ダムの稼働開始後ダム下流の水質が汚濁し、とくに平成15年の台風時には堤体下部のゲートが開放される事によってダム内に発生・滞留していた膨大なヘド

6. 平取ダムでは排砂ゲートによって毎年排砂を行うことにより、堆砂容量を130万立米と極端に少なく見積もっているが、ダム湖の上流側に堆積する土砂までがゲート開放によって全て放出されるとは思えない。このダムに年間に流入する土砂の量、質（粒径構成等）と流出する土砂の量、質はどのように予測されているか。具体的数値を知りたい。
7. ダムを建設した場合に下流側で河床低下の起こる可能性について、どのように考えているか。また、河床低下が発生した場合にはどのような影響が現れると予測しているか。
8. 去る11月18日の我々一同の現地視察の際に、その日のものと推定される鮮明な、全掌幅17センチ（体重350キロ近い）のヒグマの足跡と、2、3日前と推定される親子（今年の子）の足跡とがダム予定地の河原で観察された。ここは何時訪れても足跡が見られる、きわめて重要なヒグマの生息地である事に間違いがない。そこにダム建設という大きな攪乱を加える事による人身事故の可能性は大きい。人身、ヒグマの安全対策はどのようにするのか。
9. ヒグマを頂点とする豊かな生態系がある平取ダム建設予定地は、まさにイオルそのものである。そのイオルを破壊するダム建設とイオル再生事業をしている国土交通省の自己矛盾をどう考えるか。平取ダム建設予定地こそ、ダム建設よりイオルを保全再生すべきではないか。

北海道自然保護協会 会長 佐藤謙

北海道自然保護連合 代表 寺島一男

富川北一丁目被害者の会

十勝自然保護協会 会長 安藤御史

ザ・フォレスト・レンジャーズ 代表 市川守弘

自然林再生ネットワーク 代表 前田菜穂子

石城塾 代表 石城謙吉

事務局 二井田高敏

〒050-0085 室蘭市輪西町2丁目7-9

☎0143-44-4823